

## 大東文化大学 博士学位論文審査報告書

氏 名 亀澤 孝幸

学 位 博士（書道学）

学位記番号 甲第119号

学位授与年月日 平成27年3月20日

審査研究科 文学研究科

論文題目 書法思想史研究試論 ―文と書を軸にして―

論文審査委員 (主査) 大東文化大学教授 河内 利治  
(副査) 大東文化大学教授 澤田 雅弘  
(副査) 大東文化大学教授 門脇 廣文  
(副査) 筑波大学教授 中村 伸夫

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所  
では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

## 1. 論文の要旨および特色

まず目次に従って全体構成を概観すると、以下の如くである。

目 次

序 論

- 一 研究の主題と方法
- 二 造形芸術としての書への批判
- 三 言語に根ざす書
- 四 書法思想史研究の試み

## 第一章 「文」の起源

- 一 「文」の概念体系
- 二 殷代甲骨・金文にみえる「文」
- 三 西周金文にみえる「文」
- 四 『尚書』にみえる「文」
- 五 『詩経』にみえる「文」
- 六 「文」と祖先崇拜

## 第二章 魏晉南北朝における文論と書論

はじめに

- 一 文と詩
- 二 永明文学と永明書学
- 三 南朝における書法美学の転回
  - 1 王献之と羊欣
  - 2 王僧虔
  - 3 「工夫」の肯定
  - 4 王僧虔『論書』のテキストが孕む問題
  - 5 蕭子良と梁武帝

## 第三章 「風骨」の美学——劉勰と張懷瓘を中心にして

はじめに

- 一 魏晉から唐末までの「風骨」の用例
- 二 「風骨」の美学の形成
- 三 劉勰の「風骨」論
- 四 張懷瓘の「風骨」論
- 五 唐代文学に受け継がれた「風骨」

## 第四章 文・書・画の存在論的統合——劉勰・張懷瓘・張彦遠

- 一 劉勰の「文」の存在論
- 二 張懷瓘の「書」の存在論
- 三 張彦遠の「画」の存在論
  - 1 張懷瓘と張彦遠
  - 2 書画同体論
  - 3 画聖・吳道玄と「山水の愛」
  - 4 画の社会的地位

## 第五章 東アジア世界における書——正倉院宝物と『東大寺献物帳』

- 一 漢字文化圏の成立と書
- 二 唐王朝から奈良朝へと受け継がれた二王崇拜
- 三 『東大寺献物帳』における書
  - 1 「芸術家の始まり」としての書家
  - 2 献納品の記載順序にみる書の扱い

結 論

参考文献一覧

初出誌一覧

附 録 文学論・書論・画論史年表 (1) 古代・秦漢 (2) 魏晉南北朝 (3) 隋唐

初出誌（上記研究成果①～④）との関連で言えば、第一章は②を改稿し、第二章は③第一節を発展させて改稿し、第三章は③第二節を発展させて改稿して④としてまとめ、第四章は③第三節を発展させて改稿したものである。序論、第五章、結論は書き下ろしである。以下に、各章の要旨と特色を述べる。

## 序 論

書は中国において、文学や絵画と並ぶ最高の芸術とされてきた。文学や絵画は世界中のあらゆる文化にみられるが、書という芸術は中国を中心とする東アジア漢字文化圏に固有のものであり、言語芸術とも造形芸術ともいいがたい独特のありかたをしている。なぜいかにして、このような独特の芸術形式が発展したのか。その背景には、漢字という独自の文字体系を有することに伴って発展した、文字や書くこと——エクリチュール——にまつわる独特の思想がある。芸術としての書が成り立つのは、書をめぐる批評を基盤とする存在論や美学が形成されることによってである。それはいわゆる「書論」として結実するが、そこには言葉や文字に関する思想、文学論や画論で育まれた思想が流れ込んでいる。

本論文は、書とは何かという存在論と、書についての美学をあわせて「書法思想」として捉え、その成立の過程を他領域とのかかわりの中に辿ろうと試みる。またそれによって、単なる造形芸術の一形式としては捉えきれない書の存在根拠を見出すことを目的とする。

現代の学問は専門化、細分化の傾向にあり、分野を横断する現象、異なる分野の相互の関係、大きな歴史的な流れというものが捉えがなくなっている。しかし、書にかかわる思想は、さまざまな領域において著された書物のなかに伏流している。書を理解するには、専門領域を異にするさまざまな分野を総合する視点が不可欠であり、狭義の書論を扱うだけでは不十分である。したがって、本論文は、書論のみならず、文字学、言語哲学、文学論、画論といった分野に取って踏み込むことを厭わなかった。それらのテキストを交差させて読むこと、それが本研究の採る方法にほかならない。

## 第一章 「文」の起源

無数にある漢字のなかでも、「文」ほど多様な意味をもつものはない。それはいまなお、文化、文明、文様、天文、人文、文章、文学、文芸などといったわたしたちに身近な語彙のなかに生きている。これらの例によってもその一端が知られるとおおり、「文」はたんに文字や文章といった意味に限定されるものではなく、社会・自然・学問・芸術のあらゆる領域にわたる語彙を形成している。のみならず、「文」は特別な観念として重んじられてきた。たとえば「文人」や「文化」という語は、文字を読み書きする技能を有することが立派な教養人たることの指標であり、また文字こそが社会の発展の指標であるとみなされてきたことを示唆している。

本章は、殷代の甲骨・金文、西周金文、『書経』『詩経』にみえる「文」の用例を抽出し、分析することによって、古代において「文」に込められた理念をあきらかにしようとした。

それによってわかるのは、「文」とはそもそも、文字や文章を意味するものでも、あるいは『説文』が説くように、たんに線の交錯による美しい模様をいうものでもないということである。甲骨文・金文にみえる「文」の用例は、例外なく死せる祖先をたたえる美称である。たとえば「文人」という語は、早くも西周金文や『詩経』に見出されるが、文章を読み書きする教養を備えた人という後世の意味には用いられていない。それは死せる祖先を意味するものとして使われている。祖先から受け継がれた輝かしい文化を「文」と名指すのであり、それゆえ「文」は美しいものの謂いともなる。

だが、「文」はたんなる「美称」であったのではない。「文」は専ら祖先の遺徳をたたえるための語であり、その美しさと道徳的な偉大さとは不可分のものであった。儒教の倫理的教義の根本にあるのも、この祖先崇拜である。それ以前の狩猟採集経済あるいは遊牧民の社会とはちがって、農業経済には知識と経験に基づく計画と管理が求められる。ゆえに武力よりも文徳が、力あふれる若者よりも知恵と経験とをもつ老人、そして祖先が重んぜられた。それは孔子の「文王既に没したれども、文茲に在らずや。天の將に斯の文を<sup>まも</sup>らばさんとするや、後死の者は斯の文に<sup>あづか</sup>るを得ず」(『論語』子罕)という言葉に示される「文」の理念につながるものであり、その後ずっと儒教的思想のなかに生きてきたのである。

このように、最古の文字資料と文献資料からわかるのは、「文」という観念がすでに審美的であると同時に倫理的な価値を帯びていたということである。それは、善美の一致という中国の伝統的な美学の祖型を示している。

## 第二章 魏晉南北朝の文論と書論

文学・書・画はいずれも、後漢末まで、ほとんど娯楽あるいは卑賤な職人の技芸とみなされるか、せいぜい学問に資する基礎的な教養としてのみ価値を認められていたにすぎなかった。だが、魏晉南北朝を通じてそれぞれが芸術として発展し、唐末までには確固たる地位を築くに至った。その背景には、それぞれの芸術形式に並行して発達した批評の存在がある。すなわち、芸術形式それ自体の発展は、批評＝芸術論の発展と相即する現象として理解されなければならない。

はじめに発達したのが文学論である。中国において、文学は、諸芸術のなかで最も早くその地位を確立した。そのため文学論はあらゆる芸術理論の基礎となった。書論や画論は、文学論の理論的枠組を応用することによって、独自の理論体系を築いたのである。

魏晉南北朝において、文学形式としては漢代の賦に代わって五言詩が主流となる一方、文学論では、文学一般を指す「文」をいかに価値づけるかということが大きな主題とされた。魏・曹丕『典論』論文は、文字通り「文を論ず」るものであり、「文章は経国の大業にして不朽の盛事なり」と述べて、「文章」に国家統治と対等の価値を見出した。つづいて西晉・陸機「文賦」、摯虞『文章流別志論』(佚)、齊・任昉『文章緣起』(佚)といったものが書かれたあと、梁・劉勰によって『文心雕龍』が著された。「文の徳たるや大なり」という高らかな詠嘆から始まる同書は、「文」を「道」に基礎づけることによってその普遍的

な価値を説く。『文選』はそうした「文」の価値の確立を象徴する詞華集である。

書は、魏晉南北朝において、文学と密接な関係をむすぶことを通して芸術となった。漢代まで書の舞台は公的な場を中心としていた。文字・文章を書く行為が、ほとんど政治や学問といった公的な目的に限定されていたからである。そのような場において、個人は抑圧され、書は権力や権威の象徴として、それにふさわしい表現によって政治的な力を発揮する。反対に、尺牘や詩を通して個人の内面を文章によって表現することが可能になると、書もまたそれにふさわしいスタイルを獲得する。私的な感情を表現する文学の成立に付随して、書もまた芸術として自覚されるのである。この意味において、芸術としての書が成立する前提には、文学の成立がある。

南朝齊の竟陵王・蕭子良が西邸に開いたサロンには、沈約や謝朓をはじめとする「竟陵の八友」が集い、「永明体」と呼ばれる詩風を生んだ。中国語がもつ音韻と詩の声律上の禁則である「四声八病説」はこのときの理論的成果として知られる。しかし、ほとんど知られていないことは、王僧虔を筆頭にして、蕭子良の周りで書に関する研究がさかんに行われたという事実である。このとき、書の研究は学術的に深められ、理論や美学の面でも文学論や画論を採り入れて大きく発展する。

一般に、東晋の王羲之の登場によって、書は芸術となったといわれる。しかし、それは不正確である。当時、書とはいかなる芸術であるかという理論も、書を批評する美学も未成熟であり、また王羲之が特別に崇められたわけではなかった。つづく南朝の宋から齊にかけては、むしろ王献之の書風が流行した。それは、文学において華麗な修辞を重視する貴族主義的な傾向と一致する。王羲之を頂点とする書法観は、その後、梁代から初唐にかけて確立する。その転回点を印しているのが王僧虔の『論書』のテキストに挿入される蕭子良から王僧虔への尺牘である。そして、「竟陵の八友」のひとりとして蕭子良から大きな影響を受けた梁武帝蕭衍は、さらに遡って鍾繇を持ち上げ、王献之やそれを継ぐ羊欣の書を斥けた。こうした復古主義を契機にして、王羲之を頂点とする書法史観が固まってゆくのである。そして、そのような復古主義的思潮は、文学の領域において、劉勰が五経への回帰を唱え、それが鍾嶸や昭明太子に継承されたことと並行する現象である。

### 第三章 「風骨」の美学——劉勰と張懷瓘を中心にして

劉勰『文心雕龍』は、中国において最も体系的な文学論として知られる。劉勰が文学において最も重視する理念として「風骨」を提示して以来、「魏晉の風骨」などといわれるように、形式よりも内容を重視する文学の理念として後世に継承された。20世紀以降、多くの文学研究者たちが「風骨」について論じてきた。しかし、かれらは書論や画論との関わりについてほとんど意を払っていない。とくに注目したいのは、張懷瓘の書論に「風骨」という美学が継承されている事実である。

劉勰が提出した「風骨」という美学概念は、当時の文学の修辞主義的な傾向を批判して、五経への回帰を説くための理念であった。それから二世紀ほど時代を下った盛唐の張懷瓘

は、「風骨」という語を継承して、初唐の太宗以来確立した王羲之を頂点とする書法観を相対化しようとした。のみならず、張懷瓘が「風骨」という語を画論にも応用している『画断』の佚文が、張彦遠の『歴代名画記』に引用されている。かれらはいずれも、華麗で優美なものよりも、質朴で力強いものを志向するある種の復古主義的な理念として、「風骨」という美学概念を用いている。

それは、文学の領域においても共通する思潮であった。初唐の陳子昂が「文章の道弊れて五百年なり。漢魏の風骨は晋宋伝うる莫し」と述べたのを承けて、李白や杜甫といった盛唐の詩人たちはたくましい古代の詩を理想とした。そして、『河嶽英靈集』を編んだ殷璠は、かれらの詩を「声律・風骨始めて備う」と評した。

文学と書の領域を横断する「風骨」の美学が象徴するのは、貴族制が崩壊に向かうなか、科挙を背景に登場してきた新しい士大夫層の生き方であった。

#### 第四章 文・書・画の存在論的統合——劉勰・張懷瓘・張彦遠

劉勰・張懷瓘・張彦遠はそれぞれ、「文」とは何か、「書」とは何か、「画」とは何かという存在論においても繋がりを示す。劉勰は、『易経』を下敷きにして「文」は「道」の顕現であると説き、文学としての「文」の普遍的な価値を理論づけた。それを承けるように、張懷瓘は、「文」と「書」とは一体のものとして存在しながら、「文」とは異なるはたらきをなすものとして「書」の位相を見出す。「文章の用を為すや、必ず書に仮る。……故に能く文を發揮する者は、書より近きは莫し」(『書断』序)。「文は則ち数言にして乃ち其の意を成し、書は則ち一字にして已に其の心を見す」(「文字論」)。そして張彦遠は、「書画同体」を説いて、画の本質を、書のそれと同様に、筆跡の生動感に帰すのである。かくて文・書・画は存在論的に統合される。それを承けて、北宋には詩・書・画は一体であるという觀念が普遍化するのである。

このように、劉勰・張懷瓘・張彦遠の三者の芸術論には、文学と書と画が三位一体的に結びついていく理論的過程を見出すことができる。

詩・書・画とは、単に三つの芸術を並称するものではない。三つの異なるジャンルが三位一体として分かちがたく結びあっているという中国芸術の特異なありようを示すのである。そして、文学と画を架橋し媒介しているのが、書の存在である。

#### 第五章 東アジア世界における書——正倉院宝物と『東大寺献物帳』

中国を中心とする漢字文化圏は、朝鮮半島、ヴェトナム、そして日本列島へと拡大し、東アジア世界ともいうべきひとつの完結した世界を形づくった。日本が無文字時代を脱し、大陸から文字・社会制度・仏教・儒教といった文化を受容して律令制国家を形成していく過程において、書はいかに受容されたか。それを示すのが、正倉院宝物である。

正倉院宝物は、遣隋使・遣唐使を通して大陸からもたらされた文物を中心に構成される。いまは喪われてしまった宝物も多いが、光明皇后が献納した宝物のリスト『東大寺献物帳』

全五巻が残っており、正倉院に収められた当初の宝物がいかなるものだったかを窺い知ることができる。『献物帳』において際立っているのは、書の存在の大きさである。

その巻頭に置かれるのは聖武天皇の「雑集」、光明皇后の「楽毅論」「杜家立成雑書要略」などの書蹟である。王羲之・王献之・欧陽詢の書が数多く収められていた。そして聖武天皇は二王の真跡を手元においてとりわけ愛玩されたことが記されている。

注目されるのは、『献物帳』に記載されるさまざまな宝物の数々のなかで、唯一作者の名前が記されているのが書であるという事実である。山水画や美人画といった絵画には作者の名前は見えない。それは、中国を中心とする東アジア世界において、芸術として最も重んじられたのが書であるという事実を照らし出している。

## 結 論

「書は文の存在を前提として成立する」という認識が本論の結論である。今日、書を造形芸術と見なし、絵画の派生態のように考えるのが一般的である。本論文はある意味でそのような通念を転倒することを試みた。書は画に準ずるのではなく文に根ざすものであり、中国の伝統的な芸術観においては、むしろ画こそ書に準ずるものである。書は、文との関係においてみたとき、その独自の位相を明らかにする。逆に、文と切り離してしまえば、書は造形芸術に還元されてしまうほかない。

本論文を通して強調したのは、芸術における理論（思想）の存在意義である。芸術作品が批評や理論といった言説とは無関係に独立して存在しているかのように考えがちである。それは、芸術作品や芸術家ばかりに目を奪われ、理論や批評を軽視するといった態度に現れている。しかし、何かを芸術として観るということは、理論なしには不可能である。書もまた、その実用的な価値、そしてテキストとしての意味が括弧に入れられることによってはじめて前景化する。そのような見方ははじめから存在していたわけではない。それは、理論の発展とともに確立したのである。書の芸術性が自覚されていく過程は、書論の発展の歩みと表裏一体である。たとえば金石書や簡牘といったものは、後世になってようやく書として見出された。理論がそれらを芸術として観ることを可能にしたのである。

この意味において、理論と実践は切り離せない。本論において、もっぱら理論を研究対象としたのは、書の作品や書家と切り離されてあるのではなく、理論の発展があつてはじめて書は芸術となったからである。第二章で、南朝の書論にみえる王献之から王羲之への回帰について論じたが、その意図は理論の意義を示すことにあつた。王羲之の評価は、その死後、二世紀ほどかけて、批評のアーリーナのなかで確立されるのであり、とくに王献之の否定という弁証法的契機を必要とした。王羲之を典型とする書法観の確立こそ、書の芸術が成立したことを示すメルクマールである。とすれば、書を芸術にしたのは、王羲之その人ではなく、その後の批評であり、書論であるといわなければならない。芸術とは、何をいかに観照するかということに尽きるのであつて、そのような理論的構えなしに芸術が存在するわけではない。



## 2. 論文の審査内容および評価

本論文は、書論のみならず、文字学、言語哲学、文学論、画論の学術領域を横断的に扱いながら、全篇を通じて平易かつ明解に書かれており、各章節を一気に読み終えさせる卓越した文筆力を有する論文である。最初にこの点を高く評価しておきたい。

本研究が目指すのは、「書を支える基盤として、文字や書くことにまつわる思想の系譜を浮かび上がらせることである。具体的には、古代から唐末までの「文」と「書」をめぐる言説のなかに、書が芸術として成立する過程を辿る。またそれによって、単なる造形芸術の一形式としては捉えきれない書の存在根拠を示そうとする試みである」として、明確に研究目的が提示されている。そして具体的な視点は、

1. 言語や文字に関する思想のなかに、書の基盤となっている思想を見出すこと。
2. 書が、文学や絵画といかに理論的に結びつけられるようになったかを示すこと。

の二点に注がれる。そのために採用した方法論は、「書論のみならず、文字学、言語哲学、文学論、画論のテキストを互いに接続し、交差させて読むこと」であるとする。

確かに近年の書を専門とする研究（特に書論の研究）では、個々のテキスト読解を中心にカテゴライズして来たことから、他分野との横断的、総合的な研究の視座が欠落しかねない。この研究方法論の提起自体が壮大な試みであるが、氏は果敢に取り組み、文字学、言語哲学、文学論、画論の基本文献を整理して「附録 文学論・書論・画論史年表（1）古代・秦漢（2）魏晋南北朝（3）隋唐」にまとめた。この「文学論・書論・画論史年表」により、共時的、通時的に俯瞰するとともに、精緻に交差して考察することを可能ならしめた。よってこの年表は、視点を変えて言えば、複眼的、重層的視座を構築する基盤文献交差年表であり、同時に氏の視野の広さを証する成果と評価し得えよう。

氏はそもそも、「文章の用を為すや、必ず書に仮る。……故に能く文を發揮する者は、書より近きは莫し」（『書断』序）、「文は則ち数言にして乃ち其の意を成し、書は則ち一字にして已に其の心を見す」（「文字論」）という張懷瓘の書論二文から研究を始めた。張懷瓘の「書」は「文」に根ざすものであるとの言説を原点に据え、それを敷衍した長編注釈書を書こうとしたのである。よって本論の中核は第四章「文・書・画の存在論的統合——劉勰・張懷瓘・張彦遠」にある。上記の年表も、本章に拠って導かれたものである。

そのため本論文は、まず第一章「文」の起源において「文」の存在論的意義を確認し、続く第二章「魏晋南北朝の文論と書論」では、文論と書論を交差させた「文」と「書」の存在論的意義を論証し、第三章「風骨」の美学——劉勰と張懷瓘を中心にして」では、「風骨」という言説を巡る文論と書論と画論の交差を論証し、以上を受けて第四章の論証が結実する。最後の第五章「東アジア世界における書——正倉院宝物と『東大寺献物帳』」は、中国のみならず日本をも視野に入れた、現代に生きる「書」の存在意義の確認である。

以上の章節から見る論文構成は、如上の研究目的を見事に遂行し、具体的な論点を明解に論じ切っており、秀抜の研究論文であると言える。

以下、本論文のなかで特に秀でた視点および論点を章節順に列記する。

## 序 論

エクリチュール【(仏) écriture】は、書かれたものまたは書くことを意味し、パロール【(仏) parole】の話し言葉、音声と対比される哲学概念である。中国において、書記言語が重んじられてきたことを、「文と書」をキーワードにしてその独特の思想の系譜を実証しようとする試みは、従来の研究者には無いと独創的な視点である。

芸術としての書が成り立つのは、書をめぐる批評を基盤とする存在論や美学が形成されることによってであり、それは「書論」として結実するが、そこには言葉や文字に関する思想、文学論や画論で育まれた思想が流れ込んでいるとして、文字学、言語哲学、文学論、画論のテキストを互いに接続し、交差させて読み解こうとする。この方法論は、膨大な古典テキストを渉猟しかつ精確に読解しなければならないだけに、きわめて壮大な方法論であるが、氏は時間をかけても熟考するという研究姿勢を貫こうとする。

書とは何かという存在論と、書についての美学をあわせて「書法思想」として捉え、書の存在根拠を見出そうとした。中国では、美学者の宗白華や書学者の熊秉明に似たような研究が行われているが、日本では、存在論と美学をあわせた書の研究は皆無に等しい。

以上、エクリチュールという視点の導入、テキスト交差読解という方法論、「書法思想」という研究領域の提起、この三つは評価すべき研究視点、方法、提起であると看做し得る。

## 第一章「文」の起源

「文」は多様な意味をもつ語であるが、もっとも一般的に用いられるのは、文字や文章という意味である。中国ではとりわけ「文」が特別大切な観念として重んじられてきた。たとえば「文人」や「文化」という語は、文字を読み書きする技能を有することが立派な教養人たることの指標であり、また文字こそが社会の発展の指標であるとみなされてきたことを示唆している。本章では、殷代の甲骨・金文、西周金文、『書経』『詩経』にみえる「文」の用例を抽出し、分析することによって、古代において「文」に込められた理念を明らかにした。次の三点が評価すべき論点である。

- ・殷から西周までの文字資料や文献にみえる「文」の用例と語義を通覧して判明したのは、「文」が多く祖先の呼び名に使われていること。「文」は祖先をたたえる美称であったということ。「文」の美しさと道徳的な偉大さは不可分であり、「文」という観念はすでに審美的であると同時に倫理的な価値を帯びていたこと。「文」は善美の一致という中国の伝統的な美学の祖型を示すと論じた点。(p.34)
- ・甲骨文と金文の用義に、文様という抽象的な概念はみられないこと。「文」が文様の意味に使われるのは『尚書』と『詩経』にわずかに見出せるにすぎないこと。ここから考えれば、『説文』が原義とする文様という意味は、時代が下るにつれ祖先崇拜という形の古代宗教観念が薄れてきたことによって生まれた引伸義であると論じた点。(pp.35-36)

- ・「文」の字源について、呉其昌は「身体に装飾を施された人が直立して祭祀を受ける<sup>かたしろ</sup>のすがたに象ったものだろう」というが、殷周の文字史料や文献の用例と考え合わせれば、「文」字の象形があらわしているのは祖霊のすがたであると論じた点。(pp.37-38)

## 第二章 魏晋南北朝の文論と書論

中国芸術の特質は、個々のジャンルにおいてというよりも、むしろ文学と書と画が結びあっているその在り方にこそ見出され、魏晋南北朝から唐代にかけての芸術論史の流れを巨視的にみると、それは文学と書と画とが理論的に統合されてゆく過程ととらえることができるという視点から論証を展開した一章である。次の三点が評価すべき論点である。

- ・竟陵王蕭子良のサロン西邸に集った文人たちは、文学や書といった芸術の実践者であると同時に、仏教、文学、書を研究対象とした精力的な学術研究集団であったこと。そして齊梁を境にして、書論が本格的なものへと発展をみせるのは、この時代の文人たちによってその学術的水準が大きく引き上げられたことが大きいと論じた点。(p.48)
- ・南朝の書法史上、王羲之が称えられ、「天然」と「工夫」の二元論において、前者に価値がおかれたと一般的に理解されているが、南朝の宋から齊にかけては、王羲之は古臭いとみなされ、王献之の書風が一世を風靡していたこと。羊欣、虞穌、王僧虔、庾肩吾らは、「天然」ないし「自然」を絶対的な価値としていたわけではなく、むしろ人為的な巧みさをいう「工夫」を等しく重視していたと論じた点。(p.62)
- ・如上的ような流れを変え、復古主義を唱えたのが、蕭子良と梁武帝であること。蕭子良は王羲之を、梁武帝は鍾繇に書の理想を見出したこと。かれらの復古主義的な構えの下では、王献之は否定され、宋齊の書論家たちが積極的に肯定した「妍媚」や「工夫」は一転して反価値となること。その反対に、「天然」こそが最重要な価値とされ、人為的な彫琢や洗練を排した質朴さが評価されるようになったと論じた点。(p.67)

## 第三章 「風骨」の美学——劉勰と張懷瓘を中心にして

劉勰が『文心雕龍』で提起した「風骨」という美学概念が、どのようにして張懷瓘の書論に継承されているかを論証した一章である。次の三点が評価すべき論点である。

- ・芸術論に一早く「骨」という概念を採り入れたのは画論であること。それは、人物画を評するに際して、人物品評の批評基準をそのまま使うことが容易だったからであること。書論に「骨」という概念が現れるのは、顧愷の後であること。そして、それが文学論への応用を可能にしたと推察されること。すなわち、人物品評から画論、画論から書論、書論から文学論へと応用されることを通して、「骨」はついにあらゆる芸術批評に通ずる美学概念となったと論じた点。(pp.78-80)
- ・張懷瓘が生きた盛唐にあつては、王羲之を頂点とする書法観はすでに硬直化の兆しをみせ、また形骸化しつつあつたこと。張懷瓘は、時代の好尚がますます「円豊妍美」に傾いていく只中において、張芝や鍾繇への回帰を説いたこと。「風骨」とは、そのような復

古主義の理念を象徴すると論じた点。(p.96)

- ・劉勰の「風骨」の美学は、唐代の文学論、陳子昂「修竹篇序」、殷璠『河嶽英靈集』にも継承されていること。それはやがて韓愈らによる古文復古運動へとつながること。こうした芸術思潮は、貴族制の崩壊と、科挙による士大夫層の台頭と軌を一にするものであること。貴族主義的な文化一般を否定して、士大夫の新しい価値観が文化の上でも要求されたこと。それを背景にして、文学と書の領域において、復古主義的な美学が掲げられたのであると論じた点。(p.102)

#### 第四章 文・書・画の存在論的統合——劉勰・張懷瓘・張彦遠

劉勰の「文」における、張懷瓘の「書」における、張彦遠の「画」におけるそれぞれの存在意義を論じた上で、三者がどのように統合されていくかを論証した一章である。次の三点が評価すべき論点である。

- ・張懷瓘はくりかえし書を「文」との関係において語っていること。「書」というものもつつ自律的な価値を「文」あるいは「文章」に関係づけることによって説くこと。「文章」が十全に意を表すためには、「書」の力によらねばならないこと。張懷瓘は、「書」と「文」とが相補的な関係にあることを強調すること。「書」の位相を「文」との関係において措定することによって、「書」を存在論的に基礎づけようとしているのであると論じた点。(p.110)
- ・張彦遠は『歴代名画記』巻第一「画の源流を述ぶ」において、書と画が同源であることから論をはじめていること。顧愷之・張僧繇・吳道玄といった画史上の重要人物について批評する際、張彦遠が最も重視するのが「用筆」であり、つねに書家が引き合いに出されること。よって張彦遠は画を「用筆」の観点から書のように観ることを明確に打ち建てたこと。おそらくそれは張懷瓘から学んだものだろうと推察すること。それは張懷瓘の画論の佚文にすでにそのような観点が窺われるからであると論じた点。(pp.121-123)
- ・如上のような視点からみれば、書が文学と画を媒介し、架橋していることが見えてくること。「詩・書・画」とは、単に三つの主要な芸術を並称するものではなく、三つの異なるジャンルが三位一体として分かちがたく結びあっているという中国芸術の特異なありようを示すのであること。そして、そのような認識を可能にしているのが、書の存在であると論じた点。(p.129)

#### 第五章 東アジア世界における書——正倉院宝物と『東大寺献物帳』

中国を源流とするエクリチュールがどのように日本に受容されたかを、正倉院宝物と『東大寺献物帳』を例に論証する一章である。次の二点が評価すべき論点である。

- ・日本の漢字受容は、冊封体制への編入のためになされたのではなく、むしろそこからの離脱を契機にして主体的に行われ、そのために一気に進んだこと。漢字を採り入れることは、漢字文化圏に共通の政治・社会制度（律令制）、思想（儒教）、宗教（仏教）、芸術

といった文化基盤を採り入れることと切り離しえないこと。それは文化の総体を受容することであったと論じた点。(p.132)

- ・正倉院宝物の主要な部分を占める光明皇后による献納品の明細は、失われてしまったものも含め、『東大寺献物帳』に記録されていること。そこからは、いかなる美術工芸品にもまして書が尊崇されていたことが窺われること。聖武天皇や光明皇后は、唐の太宗、則天武后、玄宗といった歴代皇帝が書を重んじ、自ら書を善くしたことを、遣唐使とその請来品をとおして十分に知っていたこと。唐に倣い、律令国家を建設しようとした聖武天皇らにとって、書を学ぶことは、国家統治の帝王学を学ぶことの一部であったと論じた点。(p.143)

## 結 論

「書は文の存在を前提として成立する——ごくあたりまえの認識が本論の結論である。書は画に準ずるのではなく、文に根ざすものであり、中国の伝統的な芸術観においては、むしろ画こそ書に準ずるものである。書は、文との関係においてみたとき、その独自の位相を明らかにする。逆に、文と切り離してしまえば、書は造形芸術に還元されてしまうほかない」(p.151) という一文は、「書とは何か」、その存在根拠は何かを明示した総括である。同時に氏は、「本論で強調しようとしたことは、芸術における理論(思想)の存在意義である。芸術作品が批評や理論といった言説とは無関係に独立して存在しているかのように考えがちである。それは、芸術作品や芸術家ばかりに目を奪われ、理論や批評を軽視するといった態度に現れている。しかし、何かを芸術として観るということは、理論なしには不可能である」(同前)と記している。芸術作品は当代以降の芸術理論・批評によって評価されるという姿勢で理論(思想)研究を貫通させていることも評価しておきたい。

すでに序論に評価したように、エクリチュールという視点を導入し、書論のみならず他の学術領域のテキストを交差させて読解するという方法論により、「書とは何か」の存在根拠を模索した総括と姿勢が上記二文に明示されていよう。この総括と姿勢によって、文・書・画の存在論とその統合ならびにそれぞれの美学を融合させた「書法思想」の提起が可能になり、その「史」としての見通しを形成し得たと高く評価する。

総じて本論文は、壮大な学術領域を扱いながらも新書版か評論を読む感覚に捉われるほど読みやすく書かれている。それは多分に成熟した文体だからであろう。翻って言えば、それは先行研究の是非を熟考してから摘出し、その上で問題点を精確に自論へと昇華させているからである。将来さらに多くの論考を発表する才能を十二分に備えている証である。

最後に、亀澤氏に期待するが故に、今後の研究課題を三点挙げておきたい。

(1) 第一章が説く「文の力」に続く「書の力」に相当する一篇を書くこと。結論に記すように、「古代の言語思想・文学思想のなかにエクリチュール論を見出すこと」が望まれる。その一篇によって本論文はより重厚なものになろう。

(2) 上記(1)により、「書とは何か」という存在論と書についての美学をあわせた「書法思想」研究の方法論を確立して、タイトルの「試論」を外すよう超克すること。それが延いては「書道学」の位置づけに繋がるからである。

(3) 東アジア世界または漢字文化圏という研究対象を、エクリチュール論によってさらに時代的、地域的に広げ深めること。結論に「文と書」という主題だけを頼りに、言わば発見的に手探りで進められた」と述べるように、発見を大切にしながら、西洋からの視野を含むエクリチュール論の展開が望まれる。英語と古代・現代漢語の読解力を有し、中国・日本書道史に通底する氏にしか為し得ない領域だからである。

### 3. 結論

書道学専攻博士課程後期課程は、2014年7月30日に主査・副査担当予定者による亀澤孝幸氏の博士論文予備審査会を実施し、論文の提出が可能であると判断した。11月24日に審査委員会に論文の審査を委嘱されてからも引き続き直接の指導を行い、2015年2月9日に口述試験を行った。口述試験では、各委員が本論文に対して質疑した。亀澤氏はそれらの質問に率直に、誠実に回答した。特に真摯な研究姿勢、精確な文献解釈、鋭い洞察力、文章執筆能力が高く評価された。その一方で、章立てへの配慮と論理の部分的な飛躍についての指摘があった。この指摘は、論証をより高次に行い、より完璧な論文にするための要望であり、極めて高い評価であるが故の要望である。よって、審査委員会は口述試験を合格と判断し、将来の研究の発展を期待した。

以上の審査内容および評価に基づき、本論文を審査の対象とする博士（書道学）学位審査委員会は、亀澤孝幸氏が博士学位を授与されるに適格であるものと全員一致で判断したことを茲に報告する。